

岩手医科大学歯学会第17回総会抄録

日時：平成3年11月16日（土） 午前9時50分

会場：岩手医科大学歯学部講堂

演題1. トング人成人における歯科疾患

○亀谷 哲也, 中野 廣一, 田附 敏良,
石川富士郎

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座

トング人小児の歯科疾患と discrepancy の増加は、最近の食生活の変化によるものであることについて、本学会においても報告してきた。この影響は、成人では齲蝕、および歯周疾患として現れるため、今回はこの点について検討した。調査は、1990年度の文部省海外学術調査（代表：足立己幸）によるものである。

対象並びに方法：首都 132名、離島 129名の合計261名である。対照には、日本の昭和62年度厚生省歯科疾患実態調査結果を用いた。診査の方法は、演者らが日本の歯科健診で行っている基準を用い、齲蝕、歯肉炎、咬合、及び粘膜疾患、顎関節の異常について行った。

結果：20歳代から60歳以上までを5群に分けて検討した結果、現在歯数では日本人と比較して、1～2歯トング人が多かった。残存歯のうち健全歯数では、トング人の方があきらかに多く、20歳代で約13歯、40歳代が12歯、60歳代以降においても約5.5歯であった。1人当りの齲蝕歯数は、首都がやや多く、最も多い世代の30歳代で4.8歯、ついで40歳代が3.8歯であった。一方、離島では、30歳代の1.6歯が最も多く、40歳代以降では0.7から0.5歯であった。これは、日本人のそれより著しく少ない。離島の多いトングでは、処置は首都での場合が進んでおり、約40～68%の処置歯数であった。しかし、抜歯も多く離島の60歳を超える老年世代では、20.5歯の喪失歯が認められた。歯周疾患を歯肉炎によって判断すると、健全歯肉の保有者は20歳代では日本人の方が多く、トング人は加齢と共に40%から50%近くまで増加している。一方、歯肉炎が3～4度と進行した者は、日本人が著しく多い。しかし、トングでは離島の50歳代が約30%、60歳以上が約25%で比較的多く認められた。

以上のことから、トング成人の口腔は日本人と比較

して健康な状態であったが、歯科疾患発症の様子から、彼らの食行動のパターンが最近になって変化してきていることが示唆された。

演題2. 小児における顔面頭部の生体計測について —中国人と日本人との比較—

○夏 善福, 野坂久美子, 甘利 英一,
黒田 政文*, 黒田 雅行*,
高 樽**, 張 春鳳**, 羅 徳宏**,
張 仁徳**

岩手医科大学歯学部小児歯科学講座
北京医科大学**, 三沢市開業*

今回、生活環境の異なる中国と日本における小児の顔面頭部の発育について、どのような相違があるか検索し、報告した。対象は、中国では北京地域の2歳から6歳までの学齢前児童 532名（1990年に調査）、日本では、盛岡市ならびに青森県三沢市地域における、同年齢群 530名（1991年に調査）、合計1062名であった。測定はマルチン式計測器を用いて、日本、中国ともに同一計測者で行われた。測定部位は、正貌、側貌、合計24カ所であったが、今回は、とくに中国と日本の間で有意差のみられた主な部位について報告した。結果：側貌における耳—眼下ならびに耳—下顎角は、加齢に従い大きくなった。また、どの年齢群でも、男女ともに中国の方が日本の小児よりも大きな値を示したが、とくに3歳以上になると有意差を示すようになった。しかし、耳—頤下、鼻根—頤下、鼻下—下歯槽、上歯槽—頤下のそれぞれの間の距離では、逆に日本の小児の方がどの年齢群でも、また、男女ともに大きな値で、やはり3歳以上にとくに日本と中国の小児の間に有意差が見られた。同年齢群における中国と日本の小児の側貌観をみると、中国、日本ともに、女兒に比べ男児の方が全体に大きいが、形態はいずれも類似していた。しかし、3歳以上になると、中国の小児は顎角部がより発育してくるが、日本の小児では、前顔面部がより長い側貌観を呈するようになり、